



## 祖国復帰闘争碑

1966年末、復帰前の沖縄に1か月余の滞在を経験した。当時、私は東大文学部社会科学の4年生。友人が卒論を書き終え就職も決まっていた頃に、留年必至の身で敢えてした沖縄行。そのときの強烈な沖縄原体験の印象を忘れない。

貧乏学生だった私に、長旅のできる余裕はなかった。当時私が在籍していた学部のゼミと琉球大学と朝日新聞と地元紙とが共催した、大規模な社会調査企画の面接調査員としてのアルバイトだった。初めてのパスポートを手に、行き帰りともに東京港・竹芝桟橋からの長い長い船旅だった。右側通行の車とドルの換算に戸惑いつつ、那覇北部の一街区を受け持って、毎日調査対象の住民宅を訪問して、対面での聴き取り調査をした。

調査を切っ掛けに沖縄戦の話が必ず出て来る。米軍基地への不満が話題となる、沖縄の歌や踊りや神話なども聞かされた。方言も教えてもらった。何と贅沢で有意義な楽しいアルバイトだったろう。

この仕事が終わった後、辺戸岬から、茅打バンタ、万座毛、今帰仁城趾…、そして南部の摩文仁まで一通り歩いた。B52の編隊とその爆音を体験し、クリスマス休暇に米兵が溢れる街も見た。琉球舞踊も紅型も壺屋のシーサーもサンシンの音も深く胸に刻まれた。

強く感じたのは、なによりも「異民族支配」の屈辱感と、「平和で自由で豊かな本土」への復帰の願望であった。「本土復帰」は、明るい展望で語られていた。「日の丸」が、復帰運動のシンボルであった時代のことである。

「即時・無条件・全面返還」のスローガンを掲げた復帰運動の昂揚を経て、72年5月15日沖縄の本土復帰は実現した。「鉄の嵐」を経験した沖縄の人びとが真に求めたものは、平和憲法がその条文のとおり生き生きと根付いた本土への復帰だったろう。基地のない平和な沖縄を取り戻すことであったはず。しかし、現実、本土の沖縄化とさえ言われた「核疑惑付き・基地付き返還」となった。それ以来、再びの闘いが始まって今日に至っている。

沖縄本島の北端、はるかに本土を望む辺戸岬に屹立する「祖国復帰闘争碑」。その碑文を読み直す。そこに込められた想いに胸が痛くなる。

吹き渡る風の音に 耳を傾けよ  
権力に抗し 復帰をなし遂げた 大衆の乾杯の  
声だ

打ち寄せる 波濤の響きを聞け  
戦争を拒み平和と人間解放を闘う大衆の雄叫びだ  
鉄の暴風、やみ 平和の訪れを信じた沖縄  
県民は

米軍占領に引き続き 1952年4月28日  
サンフランシスコ「平和」条約第3条により  
屈辱的な米国支配の鉄鎖に繋がれた

米国の支配は傲慢で 県民の自由と人権を蹂躪  
した

祖国日本は海の彼方に遠く 沖縄県民の声は空  
しく消えた

1972年5月15日 沖縄の祖国復帰は実現した

しかし県民の平和への願いは叶えられず  
日米国家権力の恣意のまま 軍事強化に逆用さ  
れた

しかるが故に この碑は  
喜びを表明するためにあるのでもなく  
ましてや勝利を記念するためにあるのでも  
ない

闘いをふり返り 大衆が信じ合い  
自らの力を確め合い決意を新たにし合うために  
こそあり

人類が 永遠に生存し  
生きとし生けるものが 自然の摂理の下に  
生きながらえ得るために警鐘を鳴らさんと  
してある

「本当の意味での本土復帰」はまだない。そもそも、沖縄が「復帰」を求めた「祖国」とは、「日本」とは、どんな国どんな社会だったのだろうか。そして、これからの沖縄にとって、「本土」はどんな意味をもつことになるのだろうか。復帰50年、答は見えてこない。(弁護士 澤藤統一郎)

### 次号予告

「法と民主主義」2022年8/9月号(No.571)

#### 【特集】

#### 核の危機と核兵器禁止条約(仮題)

世界の核情勢と、6月にウイーンで開かれた核兵器禁止条約第1回締約国会議をはじめとする核廃絶運動の現状を報告、また核抑止論の虚妄を確認したいと、準備をしています。

### ◆針生誠吉基金◆

本誌は、故針生誠吉先生からの多額のご寄付によって、発行を支援していただいております。